

(p.p.36)

ある言語の文は、書く形態では、大文字やピリオドによって示されている。他のクエスチョンマーク、イタリック体、コンマ、エクスクラメーションマークといった句読法は構文的な構造を明らかにするために使われている。いくつかの文の意味における考えうる曖昧性はコンマを用いることで防がれることがある。

- (1) ギリシャ人は、哲学者であったのだが、たくさん話すことが大好きであった。
- (2) ギリシャ人のうち、哲学者であった人はたくさん話すことが好きだった。

二つの文の意味における違いは (1) にはコンマが使われており、(2) には使われていないことから特定される。文 (1)、コンマありの文の意味は

ギリシャ人は哲学者で、彼らは話すことが好きだった。

となり、コンマの無い 2 番目の文は、

ギリシャ人の中で話すことが好きであったのは哲学者であった。

のように言い換えられる。

(p.p.37)

同様に、エクスクラメーションマークまたはクエスチョンマークを用いることで書き手の意図が明らかになる。

- (3) その子供たちは 8 時に寝るつもりだ。
- (4) その子供たちはなんと 8 時に寝るつもりだ。
- (5) その子供たちは 8 時の寝るつもりなのだろうか。

これらの句読点は話し言葉で使われるであろう間や音調を反映している。

文 (6) では **he** はジョンか他の誰かのどちらかを差しうるが、文 (7) ではその代名詞はジョン以外の誰かを差すであろう。

- (6) ジョンは、彼は行っていると言った。
- (7) ジョンはこう言った。彼は行っていると。
(go の目的語は不明である)

短縮形や所有格で用いられているアポストロフィーはまた、常に話し言葉で使われるわけではない構文上の情報を与える。

- (8) 私のいとこの友達 (1人のいとこ)
- (9) 私のいとこの友達 (2人かそれ以上のいとこ)

このように考えてみると、書くことは話し言葉をいくぶんか反映している。しかし、時として句読点が2つの考えうる意味の見分けることを不可能にしてしまうかもしれない。

- (10) ジョンはそのメッセージをビルにささやき、そのあと彼はそれをメアリーにささやいた。

(p.p.38)

標準的な(10)の書式においては、**he**はジョンまたはビルを差しうる。話し言葉においては、もし**he**が特別な強勢(対比強勢と呼ばれる)を受けたならばそれはビルを指すに違いないだろうし、**he**がふつう程度の強勢を受けたならば、それはジョンを指す。話すとき、われわれはふつう対比強勢を用いて文中の任意の単語を強調することができる。われわれは時としてこれを書く際に強調された単語をすべて大文字にしたり下線を引いたりイタリック体にしたりして示そうと試みる。

- (11) **ジョン**はビルの妻にキスをした。(ビルではない)
- (12) ジョンはビルの妻に**キス**をした。(彼女をたたいたというよりむしろ)
- (13) ジョンは**ビル**の妻にキスをした。(ディックでも彼自身の妻でもなく)
- (14) ジョンはビルの**妻**にキスをした。(ビルの母親ではなく)